

1

1 I 外的
II 反応

2 外的
I ける
3 A ウ
B ア

4 退屈
5 自分を
6 工

7 創造性を促
8 受け身
9 主

10 a 動向
b 利用
c 求めて

2

1 a 散らばる
b 勇氣
c 牧場

d 唱えて

2 1 才
2 ア
3 ウ
4 イ
5 工

3 I 美音を守れ
II 生まれつき

3 II ii 風疹にか
I うつした
III 日本で

4 成績
5 頑張り屋
6 イ

7 ウ
8 (記述題)
9 イ

2

8 挑むこと
とがで
十二歳
でな
れる
とい
う気
持ち
に
自分
を変
える
こ

(同意可)

配点	
1	10
2	1
各2点×7=14点	
2	8
6点	
その他 各4点×20=80点	
100点	

1

この先を読み進めていくと、「読めば反応せざるを得ない」「自分の反応に対してどんな反応があるかが気になって落ちつかない」など、飛び込んでくるものに対していちいち「反応」している様子が書かれている。よって **II** には「反応する」があてはまる。 **I** には「メッセージ」や「ネット検索」「YouTube」などの「飛び込んでくる情報」をまとめた「外的刺激」があてはまる。

2 このような抽象的な表現が出てきた時には、この後でこれについての説明がなされているであろう、と考えて読み進めよう。「接続」とはここでは「外的刺激」との接続のことなので、「外的刺激に反応しないようにする」といった内容だろうということもふまえて探したい。

3 (A) の後には「外的刺激を(うまく)リヨウする」具体例が述べられているので、「たとえば」があてはまる。(B) は前に述べられている「接続を遮断されると退屈でたまらなくなる」ことが原因で後の「ネットを介したつながりをモトめてしまう」という結果につながるので、「そこで」があてはまる。

4 本文中のここより後で「退屈」の利点について述べられていることから考えられる。

5 設問の「スマートフォンやパソコンを常にチェックしている人に起こる」という文言に注目しよう。つまり「外的刺激」に反応することに慣れ続けるとどういったまずいことになるのか、ということである。

6 「**5**」というのでは意味がない」とあるので、「退屈を引き起こしている状況から立ち去る」方法の中で最も良くないものが答えとなる。プラスの状態になるために「あえて刺激を絶ち、退屈でしかたがないといった状況」にしているわけなので、最も良くないのは「外的刺激」にさらされる状況になる、ということだろう。

7 直後の「〜に活かす」という表現から、「建設的な方向」とはプラスの方向だろうと見当がつく。——線⑥を含む文の次の文に「そういった視点に立つと、トゥーヒーのつぎのような指摘も〜」とあるので、この直後のトゥーヒーの考察部分から探そう。

8 **7** の直前の「それ」が「そんな状況(＝退屈でしかたがないといった状況)にどっぷり浸かることで〜」という直前の一行の内容を指していることをまずはおさえよう。そのうえで「それが、**7**」で「反射的な生活から」とあるので、「退屈」になる前の生活、つまり「外的刺激」を受けていた時の生活について述べられている部分から探そう。

9 **8** の直後の「創造的」という表現から考えよう。「主体的」とは自分自身の考えや判断によって行動する様子である。

10 a 「動向」は人や物事が動いていく方向のことである。「同行」などの別の同音異義語を書かないようにしよう。

2

1 b 「勇氣」の「勇」の上の部分「々」としないように、d 「唱」の左部分を「日」としないように気をつけよう。正しい字形で覚えることは基本中の基本である。

2 これらの会話文の直前にある「東駒は遠いか？」と内容的につながる才が(1)にあてはまる。そして、会話の流れとしてアウ、イエエとつながることをおさえたいので、(5)の直後の「それだけが目的なら〜」からエが(5)にあてはまる、と考えよう。

3 この発言の後で「はい、おれは……自分が嫌いです」と言い、加地先生に「そうか……。理由を聞いてもいいか」と返された後、「おれ、妹がいるんです」から「自分が嫌い」な理由を説明している。「生き方を変えたい」と思っているのは俊介なので、俊介の発言の中から探そう。この後を読み進めていくと、妹は生まれつき耳が聴こえないこと、自分が幼稚園でかかった風疹のせいであると俊介は考えていること、妹のために頑張ってきたこと、志望校に合格できれば自分を許せるかもしれないと思ったことなどが語られている。

4 ——線②の直後で、加地先生が合格点に達していなかった俊介を合格にした理由を話しているので、そこから探そう。

5 設問の「性格をあらわす言葉」という文言に注目したうえで、**3** を含む加地先生の発言の続きである「お母さんの言葉は嘘じゃなかったよ。四月に入塾してからこの半年間、おまえは本当によく頑張ってる」から考えよう。

6 ここまでの場面で「いまのこの気持ちを誰かに話さないと、心が破裂しそう」なくらい追いつめられていた俊介が両親にも話していないことを加地先生に打ち明けていることを読み取ろう。——線④の後の「先生の言ったとおりだった。これまでずっとしんどかった。〜自分が弱音を口にするなんて許されないと、怯えていた」という部分から、先生が言ってくれたことで救われている俊介の気持ちが読み取れる。

7 ——線⑤の直後に「……おまえの気持ちがおれにはわかるよ。先生にも守らなきゃならない家族がいる」とあるので、「そんな大きなもの」とは人生をかけて守るべき存在を指していると考えられる。この存在とは、俊介にとってはもちろん妹だろう。

8 本文最後にある「もちろんだ」からはじまる加地先生の発言をまとめればよい。「人は挑むことで自分を変えることができる」「十二歳でそんな気持ちになれる」の両方の要素をうまく盛り込もう。

9 「日本で一番難しい中学校に挑んで、もし合格したなら、自分を許せるかもしれない」「生き方を変えたい」と思って中学受験に挑もうとしている俊介にとって、——線⑥の直後に並んでいるような中学受験を否定するような言葉はつらいものだろうと推測できる。ウの「つるつると滑っていくような言葉」は「頭の中にこびりついて離れなくなっていた」という本文中の表現と合わない。